
コンビネーションハンター

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビネーションハンター

【Nコード】

N8786H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

エルフの村のハンターディアルゴは祖父の代から岩山にいるヒポグリフと戦ってきた。一人では到底倒せない彼に村の娘イザベラが声をかけてきて。この作品の主人公はエルフです。

第一章

コンビネーションハンター

ディアルゴは長い間ある獲物を追っていた。それが何かということ
これまたとてつもないものであった。

「あれっ、あんたまだあいつを狙ってるのかい」

「また頑張るねえ」

たまに街に入ればこう声をかけられる。

「ヒポグリフだったな、確か」

「あんたの獲物は」

「ああ。只のヒポグリフじゃないんだよ」

その精悍で日に焼けた顔で答える。黒髪は後ろで束ね鋭い目が黒く光っている。眉は太く一文字だ。身体はエルフにしては小柄だが実によく引き締まっている。

「もう何ていうかな。あいつは」

「確かシルバーヘッドだったかい？」

「あれだよ、銀色のヒポグリフかい」

「そうさ、全身が銀色の毛のヒポグリフなんだよ」

それだというのだ。ヒポグリフとは頭が鷲で身体は前の半分が鷲、後ろの半分が馬となっている。そして大きな鷲の翼を持っているのだ。

「しかも人の言葉も話すんだよ」

「頭もいいんだね」

「随分厄介な獣だね」

「そうさ、しかも強いんだよ」

ディアルゴはこのことも話した。

「とてもね」

「だからあんた捕まえられるんだね」

「ずっとね」

「いや、絶対に捕まえてみせる」

彼は強い声で街の者達に言った。

「絶対にな。捕まえてやるぞ」

「じゃあその時を待ってるよ」

「あんたの腕を信じてね」

「俺はハンターだからな」

これが彼の仕事だった。職業とも言う。生まれてからずっと森の中のエルフの村に住んでいる。そして山で長い間そのシルバーヘツドと戦ってきているのだ。

「絶対に捕まえるさ」

「確かあんたで三代目だったね」

「あいつを狙っている村のハンターは」

「爺さんも親父もあいつを狙っていた」

ディアルゴはここで遠くを見る目になって街の人達に話した。

「けれど爺さんも親父も結局捕まえられなかった」

「弓に当たらなかったんだね」

「駄目だった。一本もな」

当たらなかったというのだった。無念さに満ちた声で。

「全然な。当たらなかった」

「確かにヒポグリフって素早いけれどね」

「けれどあんたエルフだよな」

「ああ、そうさ」

今度は彼の種族の話になった。そう、彼はエルフなのだ。その尖った耳がそのことを何よりも教えている。目は澄んだ緑で森エルフであることも教えていた。

「エルフっていえば弓だけれどさ」

「それでも駄目なのかい」

「そうなんだよな。三代に渡って駄目だった」

「物凄い奴だね、つくづく」

「しかもだよ」

街の人達は彼自身についても言った。街の人達は彼と同じエルフだけではない。人間もいればホビットもドワーフもいる。そしてノームや犬人に猫人、竜人にリザードマンもだ。実に様々な種族が共に暮らしている街だった。彼は今その街にこの前捕らえたホワイトタイガーの上等の毛皮を売りに来ているのだ。

「あんたのその腕で駄目なんだからねえ」

「わしはほら」

ここで竜人の年老いた男が彼に言ってきた。

「あんたの爺さんとは若い頃から知り合いだったがな」

「百年以上前だよな」

「そうさ、本当に長い付き合いだったよ」

エルフはヒューマノイドの中では長命である。寿命は百を超える。竜人は一五〇年にもなる。それだけ長寿の種族であるのだ。

「だから爺さんの腕も知ってるがな」

「村で一番の狩人だった」

孫であるディアルゴ自身の言葉だ。

「それこそ狙った獲物は逃さなかった」

「あいつ以外はな」

そして竜人はここでこう言ったのだった。

「外さなかった。あんたの親父さんもだ」

「俺の弓矢の腕は親父に教えてもらったんだよ」

ディアルゴはまた回りに述べた。

「これはな」

「そうだったね、それもね」

「あんたの親父さんもね」

そして父についても皆話すのだった。

「いい腕前だったよ」

「けれどそれでもあいつはかい」

「俺がやってやるんだよ、だから」

ディアルゴの言葉にはいよいよ気合が入ってきていた。

第二章

「あいつは俺が撃ち落とすんだ。爺さんと親父の願いを適えるんだ」
「頑張りなよ」

竜人が彼に声をかけてきた。

「いいな、絶対にだよ」

「親父は爺さんが死の床にいた時に頼むって言われて」
ディアルゴはここでまた話す。

「そして俺は親父が死ぬ時にな。言われたからな」

「三代目だね、本当に」

「あんたが」

「そうさ、だからこそ今度こそ仕留めてやるんだ」
言葉にこもった気合はそのまま強くなっていく。

「絶対に」

「頑張りなよ、それじゃあね」

「絶対にね」

「ああ、やってやるさ」

彼の言葉は本気だった。その本気の言葉で誓うのだった。その誓いは本物だった。そうしてその誓いを胸に村に戻りすぐに。狩りに出るのだった。

「ディアルゴ」

「イザベラ」

若い白い肌の娘が彼に声をかけてきた。エルフに相応しい美貌の持ち主で目はやはり澄んだ緑だ。そして髪は砂色でさらさらとしている。その彼女が彼のところに来たのだった。

「またあの山に行くのね」

「ああ、そうだ」

薄い身体の形がはっきり見えるくるぶしまでの長い麻色の服を着た彼女に答える。彼は動き易いように皮の鎧を上着の上に着けてい

る。すね当てがズボンの上から着けられている。

「またな。行って来る」

「シルバーヘッド。捕まえるのね」

「今度こそな」

こう彼女にも誓うのだった。

「絶対にな」

「そう」

イザベラは彼のその言葉を聞いて少し寂しい顔になった。

「またあそこに行くのね」

「それがどうしたんだよ」

「ねえディアルゴ」

寂しい顔を消して彼に言ってきた。

「シルバーヘッドが捕まらなかったらどうするの？」

「どうするのって？」

「だから。その時はどうするの？」

こう彼に問うてきたのだった。

「その時は一体」

「絶対捕まえるさ」

彼の返答はこれだった。

「絶対にな。捕まえる」

「そう。絶対になのね」

「一生かかっても捕まえてやる」

彼はまた言った。

「それか倒してやる」

「とにかくどうにかするのね」

「ああ、俺がやらないで誰がやるんだい？」

まさにこれが彼の考えだった。

「他の誰が。そうだろ？」

「わかったわ」

イザベラも遂に頷いた。彼の考えを認めたのだ。しかしだった。

彼女はここで。彼に対してこう言ってきたのだった。それも強い声で。

「けれどね」

「けれど？」

「私も一緒に連れて行って」

顔を上げての言葉だった。

「私も一緒に。いいかしら」

「一緒にって？」

「私は僧侶よ」

それが彼女の職業だ。ディアルゴがハンターなのに対して彼女は僧侶なのだ。村で代々僧侶を務めているのが彼女の家なのである。

「だからね。私も一緒にね」

「連れて行けっていうのか？」

「そうよ」

こう言うのだった。

「それで御願い」

「一緒にか」

「貴方のお爺さんもお婆さんと一緒に行っていたのね」

「何でそんな話を知ってるんだい？」

「有名じゃない」

くすりと笑って彼に返すイザベラだった。

「このことも。そうでしょ？」

「そうだったのか？」

「そうだったのかじゃないわよ。お婆さんはあれでしょ」

ディアルゴの今の間の抜けた返事には思わず苦笑いになってしまったのだった。

第三章

「魔法使いだったのよね」

「本当によく知ってるな」

「だから。有名じゃない」

やはりこう言って苦笑いを浮かべるイザベラだった。

「このことは」

「そうさ。それでお袋は忍者だった」

「くの一だったのね」

「東の方で修行を積んでな。こっちに戻ってきてな」

忍者はあらゆる職業の中でもとりわけ特殊な職業である。侍と共に東方でしか身に着けることはできない。彼の母はわざわざ村を出て東方で忍者になったのである。

「それで親父と一緒にになってな」

「それじゃあ私もよ」

そしてまた言うのだった。

「一緒にね。連れて行って」

「いいのかい？ 危ないよ」

しかしディアルゴは彼女にこう言われても賛成する顔は見せなかった。

「ヒポグリフは」

「とても強いよね」

「そうさ」

そうだと言うのだった。実際に。

「それかなりな。強いよ」

「わかってるわ」

だがイザベラはそれをわかっているというのだった。

「それもね。わかってるわ」

「わかってるのかよ」

「そうよ。それに私だって」

今度は自分から言うイザベラだった。

「ちゃんと修行してきたから。だからね」

「大丈夫っていうんだよね」

「そうよ」

やはりこう答えるのだった。

「最高位の僧侶の魔法だって使えるし」

「えっ、それも？」

「って知らないの？」

「何時の間にそんなに強くなったんだよ」

「貴方が知らない間によ」

こう答えるしかなかった。彼があまりにも何も知らないのだ。

「ずっと山や森にいて村にはあまりいないでしょ」

「それはそうだけれどさ」

まさにその通りである。実は彼はいつも森や山で魔物や猛獣を相手にしている。だから村にはあまり帰ることはなかった。だから村のことはあまり知らないのである。

「そういうあんただって」

「俺も？」

「ハンターとしてはこの世界で最高だって言われてるでしょ」

「そうだったのか」

「あんたのことなのに何で知らないのよ」

今度はさらに呆れてしまったのだった。

「自分のことでしょ、これは」

「まあそうだけれどさ」

一応はこう返すがそれでも自覚は沸かないままだった。

「とにかく。行くんだよね、一緒に」

「そうよ」

しかしもそのことを変えないイザベラだった。

「だからね。それでいいわよね」

「言っても聞かないよね、やっぱり」

「当たり前よ」

そしてイザベラも居直ってさえきたのだった。

「言い出したら絶対に聞かないわよ」

「やれやれ。それじゃあ」

ディアルゴは彼女のその言葉を聞いて。ふう、と溜息を出してから言うのだった。

「わかったよ」

「いいのね」

「うん、いいよ」

また答えるディアルゴだった。

「全く。昔から言い出したら聞かないんだから」

「エルフの娘は強情なのよ」

やはり居直りであった。

「だから。わかったわね」

「わかったよ。じゃあ一緒にね」

「行こうか」

ディアルゴは渋々ながらシルバーヘッドとの勝負にイザベラを連れて行くことにした。彼女はすぐに動き易い法衣とズボン、それに僧侶の杖と盾も持ってそのうえでディアルゴのところに戻ってきた。そうしてそのうえで何と逆に彼を急かしてきたのであった。

第四章

「行くわよ、いいわね」

「行くわよって。ついて来るんじゃないのかい？」

「そんなことはどうでもいいじゃない」

しかもこう言う始末だった。

「わかったら。いいわね」

「凄く釈然としないけれどいいよ」

いい加減懽然としながらも答えるディアルゴだった。

「それじゃあね。行こうか」

「ええ、それじゃあね」

こうして二人で行くことになった。何日か森の中を進んでそのうえでその山に辿り着いた。山はまさに岩山であり荒涼としそのうえ途方もなく高い。二人はその中に入っていく。

岩山にあるのは道とすら呼べないような道と岩ばかりだった。時折小動物が見える程度だ。ディアルゴはその道を先に進みながらイザベラを見る。すると彼女は。

「全く平気なんだね」

「そうよ」

平然とした顔であった。にこりと微笑んできてさえくる。

「これ位何でもないわ」

「随分きつい道だと思うけれど」

「だから。私だって強くなったのよ」

彼女は彼女でこう言い返してきたのだった。

「私もね。わかる？」

「だから平気だっていうんだね」

「そういうことよ」

やはり平然とした顔で答えてくる。

「こんな岩山幾ら進んでもね」

「そういえばここまでの森の中の魔物だって」

「あんなのもどうってことないわ」

それもなのだった。

「全然ね」

「本当に強くなったんだね」

ディアルゴの言葉は感心半分、呆れが半分だった。

「冗談抜きに」

「あんただってね」

そしてイザベラはイザベラで言い返してきた。

「昔は泣き虫でどうしようもない位弓だって下手だったのに」

「昔は昔だよ」

ディアルゴはイザベラの今の言葉に少しムキになって返した。

「俺だってさ。長い間ずっと弓を持ってきたんだよ。グリフォンやキマイラだって一人でやつつけたことだってあるしさ。ワイバーンだってね」

「それは私だって同じなのよ」

しかしイザベラの方が一枚上手なのだった。

「私だって僧侶としてね」

「そういうことだね」

「そういうこと。わかったわね」

あらためてディアルゴに対して言った言葉だった。

「そのことはね」

「わかったよ。しかしイザベラがいてくれて」

「まだ邪魔だっていうの？」

「いいや、もうそれは言わないから」

それは否定するディアルゴだった。

「助かってるなって思ってたさ」

「助かってるのね。私がいて」

「そうだよ。二人でいるとやっぱり楽だね」

言いながら上を見る。そこには頂上があった。シルバーヘッドが

いるその頂上がだ。

「これならひよつとして」

「いけるのね」

「ひよつとしたらだけれどね」

こう言いはする。しかしその表情は明るい。

「出来るかも知れないね」

「出来るようにするのよ」

だがイザベラはここで強い言葉を出してきた。

「出来るようにね。いいわね」

「つまりシルバーヘッドを捕まえるか倒すってことだよね」

「そうよ。その為にここに来てるんでしょう？」

あらためてこのことを言ってきたのだった。

「ここに。そうでしょう？」

「そうだけれどさ」

言われた通りだ。勿論そのつもりである。しかし彼は実際のところどうも不安があったりした。このことは決して口に出したりはしなかったが。

「一人より二人よ」

イザベラはまた彼に言ってきた。

第五章

「あんたにとっていいことよ。わかったら頂上に行くわよ」

「わかったよ。さて、頂上に着いたらだけれど」

「後ろは任せて」

イザベラがまた彼に声をかける。

「攻撃の魔法だって使えるし」

「僧侶の攻撃の魔法？ ああ、あれね」

話を聞いてすぐに思い出したディアルゴだった。

「風の魔法とかだよ」

「そうよ。相手が空を飛ぶのなら効き目はあるわよね」

「確かにね。それだったら」

「私がいれば百人力でしょ？ だから余計に」

イザベラの言葉は余計に誇らしげになってきていた。

「わかったら。いいわね」

「うん、何かこればかり言っているような気もするけれど」

「頂上よ。それでシルバーヘッドをやつつけるわよ」

「了解」

こんな話をしながら二人は頂上に向かった。そうしてその頂上に辿り着くとだった。上にその巨大なヒポグリフが羽ばたいて姿を現わしたのだった。

「シルバーヘッドだな」

「如何にも」

そのヒポグリフはディアルゴを見下ろしながら彼の言葉に答えてきた。やはり頭と身体の上半分は鷲で下半分は馬だ。それに雄々しい翼がある。頭はおろか全身が銀色の美しい毛で覆われている。それが彼の名前になっているのが明らかであった。

「そういう御前はだ」

「そうだ、ディアルゴだ」

彼はシルバーヘッドを見据えて己の名前を名乗った。

「御前をやつつけるハンターだ」

「あのエルフの孫か」

シルバーヘッドも彼の祖父のことを思い出していた。

「そして息子だったな」

「爺さんと親父のこと、覚えているな」

「全く。何度も何度も来てくれた」

シルバーヘッドは忌々しげに彼に対して答えるのだった。

「その度にわしに退けられておめおめと去っていったな」

「それも今日で終わりだ」

「御前の口からもその言葉は散々に聞いたぞ」

既にシルバーヘッドと何度も戦っているディアルゴだった。だがその結果はどうであるかはもう言うまでもないことだった。それが現実であった。

「これで何度目だ？」

「何度目だっていいだろうがよ」

ディアルゴは苦しい反論で応えた。

「とにかく今度こそ御前を倒す、覚悟しろ」

「わしの辞書に覚悟という文字はない」

シルバーヘッドもかなり言う。

「これは前に言ったぞ」

「前に言ってもまだ俺は諦めていないんだ」

ディアルゴはシルバーヘッドを見据え続けたまま再び言い返す。

「今度こそ御前を倒してやるからな」

「やれやれと言っておこう」

ヒポグリフの容赦のない言葉が続く。

「しかも今度は僧侶まで連れて来たのか」

「それが悪いのかよ」

「祖父は魔法使いで父は忍者か」

「それが悪いの？」

「悪いとは言わん」

今度はイザベラに対して言葉を返すシルバーヘッドだった。彼はその見事な翼で羽ばたき続けている。そうしてそのうえで彼等を見下ろしているのだった。

「またしてもという感じだ」

「またしてもなのね」

「人間もエルフも懲りん種族だ」

そして彼はこうも言うのだった。

「少しは諦めたらどうだ？」

「悪いが俺は諦めの悪い男でね」

「私だってそうよ」

ディアルゴだけでなくイザベラも言い返してみせた。

「絶対に御前を捕まえるかやつつけてやるからな」

「それも今ね」

「ではやってみせるがいい」

ヒポグリフは平然とした面持ちでここでも彼等に言葉を返した。

「気が済むようにな」

「ちっ、この余裕が頭に来るんだよな」

「あんたそんなに強いっていうの？」

「千年生きておる」

シルバーヘッドはまた言葉を返してきたのだった。

「それから見れば所詮エルフもな」

「ちっ、じゃあこっちは若さを見せてやるぜ」

「見ていなさいよ」

二人はシルバーヘッドを見据えながら言葉を続ける。そしてであった。

ディアルゴが弓をつがえ。そしてそれを放った。

鋭い矢がシルバーヘッドを下から襲う。しかしヒポグリフはそれを何なくかわしてしまった。

第六章

右から左に身体を動かして。それで終わりだった。

「この程度か？」

「勿論これで終わりじゃない」

ディアルゴもこれで彼を倒せるとは思っていないのだった。

「続いてな。これでだ」

「ふふふ、一本ではわしを落とすことはできん」

彼が矢を複数構えてきたのを見てまた笑ってみせてきた。

「何本でもだ。できるかな！」

「やってみせる、こうやってな」

矢を複数一度に放った。しかも波状にだ。それでシルバーヘッドを撃とうとするがそれでもだった。それもまたあえなくかわされてしまったのだった。

「この程度でも駄目だな」

「ちっ、これも駄目だっていうのかよ」

「御前の祖父や父もこの程度は普通にやっていた」

シルバーヘッドはここでディアルゴに対して言ってきたのだった。

「普通にな」

「こんなことも普通にかよ」

「まさかこれで終わりではあるまい？」

少しばかり挑発するような物言いであった。

「まさか。複数の矢を同時に放つ程度ではな」

「その通りだ。それなら今度は」

「ほう。今度はそれか」

「こうしてな。一度に放つだけでなく」

複数の矢を同時につかえるのは同じだった。しかし今度はそれを一本ずつ放つ。そうしてそれにより矢を連射してきてみせたのだ。

「こんなやり方も覚えたのさ。これはどうだ？」

「ふむ。確かにのう」

矢が続けざまにシルバーヘッドを狙ってきた。一本、また一本と。その流れはまさに流星だった。下から上に襲う流星であった。

「これはまた見事なものじゃな」

「これならどうだ？」

「確かにやることはやる」

ヒポグリフもそれは認める。

「しかしじゃ」

「しかし？まさか」

「その通り。ほれ、この通り」

言いながらだった。空中でその巨体を左右に細かく動かしそのうえで、であった。彼が繰り出すその流星の如き弓矢を全てかわしてしまった。

「軽いものじゃな」

「これは俺が渾身の攻撃だったんだぞ」

ディアルゴも今回ばかりは呆然としていた。

「それでも駄目なのかよ」

「これも主の祖父や父がやっていたことじゃ」

これもだというのだった。

「まあいい技ではあったがな」

「ちっ、これでも駄目なのかよ」

ディアルゴは今度は歯噛みになっていた。

「何て奴だ、全く」

「驚いたか？しかしわしはまだこの通りじゃぞ」

シルバーヘッドはあえて余裕に満ちた顔を見せて彼に言ってきたのだった。

「無傷じゃ。全くな」

「ちっ、化け物かよ」

「だからわしは普通の獣ではないぞ」
まさに今更ながらの言葉だった。

「ヒポグリフじゃぞ。千年生きているな」

「まあそういえばそうだけれどな」

相手に突っ込まれて何も言えなくなったディアルゴだった。

「それはな」

「わかつてくれたな。それでじゃ」

「今度は何なんだよ」

「そこにいる僧侶の娘じゃ」

「私なのね」

それまで黙って見ていただけだったイザベラがここで応えるのだ
った。

「どうするのじゃ？それで」

「あのね、私だってね」

ここで少しムキになってシルバーヘッドに言い返すディアルゴだ
った。

「僧侶なんだから。見ていなさいよ」

「見ているだけではないのじゃな」

「そうよ。ほら、こうして」

右手に持つその杖を上にかざしてきた。そうしてその杖から風を
出す。それは竜巻でありシルバーヘッドに対して一直線に向かうの
だった。

第七章

「どう？トルネードの魔法を」

「ほほう」

「僧侶の使う風の魔法でも高位の魔法」

それだというのである。

「どうかしら。これは」

「確かにやるのう」

それはシルバーヘッドも満足した顔で見ている。

「これはな」

「そうでしょう？じゃあこれは流石にかわせないわよね」

「いや、こうすれば終わりじゃ」

その身体に何か障壁を出してきた。そうしてそれでイザベラが出したそのトルネードをあっさりと防いってしまったのだった。それで終わりだった。

「えっ、それで終わり！？」

自分の魔法が防がれてしまったのを見て啞然とするイザベラだった。

「何なの！？それって」

「だからわしは千年生きておるのじゃぞ」

シルバーヘッドはここでも悠然としていた。

「この程度。造作もないことじゃ」

「くっ、トルネードまで防ぐなんて」

「低位の鎌イ足やそれを幾ら出しても同じじゃぞ」

機先を制するような言葉であった。

「それこそな。そんなのが幾らあってもわしを倒すことはな」

「できないっていうのね」

「左様。無論じゃ」

今度はディアルゴに顔を向けて言ってきたのだった。

「そして主ものう」

「くっ、さっきのでは駄目だっていうのかよ」

「まさかこれで終わりではあるまい」

「またしてもディアルゴを挑発するような言葉であった。」

「来るがよい。さらなる技でな」

「ならよ、見せてやるさ」

「覚悟しなさいよ」

ディアルゴだけでなくイザベラも言ってきた。彼女も意地になっていた。

「イザベラ」

「ええ、ディアルゴ」

二人はそのうえで顔を見合わせた。

「やるぞ、いいな」

「いいわよ」

二人で顔を見合わせての言葉だった。

「俺も渾身の技を出すからな」

「私だってよ」

「息を合わせるぞ」

「承知したわ。それじゃあ」

二人は頷き合ってそのうえで動きはじめた。まずはディアルゴが右に、そして次にイザベラが左に。それぞれ動きはじめたのだった。二人の動きはそのまま流れるかのようにだった。摺り足のよう動いていく。そのうえで動く速さも何もかもが合わせ鏡のように同じものになっていた。

そしてそのうえで。ディアルゴは弓矢を、イザベラは竜巻をそれぞれ放っていく。その無数の弓矢と竜巻がシルバーヘッドに向かうのだった。

「どうだ、これは！」

「流石のあんたでもね」

二人は顔も彼に向けていた。

「そう簡単にはかわせないよな！」

「その通りでしょ！」

「ふむ」

しかしだった。シルバーヘッドはその弓矢と竜巻を見ても。それでも平気な顔をしてそのうえで動いてみせてきたのであった。

「！？嘘だろ！？」

「この攻撃もまさか！？」

「だから何度も言っておるだろう」

まさかといった声をあげた二人に対しての言葉だった。

「わしは千年生きておるのだとな」

「じゃあこれもだっていうのかよ」

「そんな馬鹿な」

「馬鹿なでもない」

言いながら何と。身体を縦と横と斜めに動かしてきた。それにより無数の残像を出してみせた。弓矢も竜巻も全てその残像達を通り抜けていくだけであった。

「何て奴だ」

「分身したって」

「こうしたこともできるのじゃ」

その分身するシルバーヘッドの言葉だった。

「残念じゃったな」

「俺達のこの攻撃も無理だっていうのかよ」

「何て奴なの」

「確かにできることはできる」

シルバーヘッドは一つに戻ってきた。そうしてそのうえでまた二人に言ってきた。

「しかしじゃ。それでもまだわしを傷つけることはできんのう」

「ちっ、殆ど神様だな」

「長生きしてるわけじゃないってことね」

「また来るのじゃな」

そしてこうも言ってみせたシルバーヘッドだった。

「またのう」

「ふん、今日は負けを認めてやるわ」

「私もよ」

二人は忌々しげに言葉を返した。

第八章

「これでな。俺は手前に攻撃を当てることができなかったからな」
「私もよ」

「しかしまだ諦めたわけではあるまい」
シルバーヘッドは今度はこう尋ねてきたのだった。

「そうじゃな、それは」

「ああ、そうさ」

「それはね」

二人は忌々しげな顔をしていた。しかしそれでも表情ははっきり
していて目は死んでいなかった。いや、むしろ生きてさえいるもの
だった。

そしてその生きている目で。言い返すのだった。

「この程度じゃな」

「また来るわよ」

「その意気じゃな」

彼もまた二人のその言葉を受けていた。

「ではな。また来るのじゃ」

「ふん、その時こそ覚えてろよ」

「あんたをひれ伏させてやるわ」

とにかく負けはしたがくじけてはいなかった。それは変わらな
かった。とにかく彼等の心は倒れてはいないのであった。起き上が
つたままだった。

「いいな、次だ」

「見ていることね」

「では帰るがいい」

シルバーヘッドの言葉は変わらなかった。そして悠然と空にはば
たき続けていた。

二人は帰り道でキャンプを張っていた。そうしてそこで火を囲ん

で夜食を摂っていた。食べているのは二人で捕まえた魚と見つけたきた果物であった。そうしたものを火を囲んでそのうえで二人向かい合って食べていた。

魚は火で焼いている。果物はそのままだ。水は水筒の中にある。万全な状態でそのうえで夕食となっていた。火の側に串刺しになって頭が下にある魚達がある。

二人はそれぞれその魚達を食べながら。そのうえで話をしているのだった。

「それでな」

「何？」

「御前あの時言ったよな」

こうイザベラに対して言ってきたディアルゴだった。彼もイザベラも木の倒れたものをその椅子にして腰掛けて魚を食べている。

「また来るって」

「ええ、言ったわよ」

イザベラも魚を食べながらそれを認めた。

「それがどうかしたの？」

「いいんだな、それで」

彼は真面目な顔で彼女に問い返した。

「あいつのところに行くっていうのはな」

「わかってないで答えると思ってるの？」

逆にこう返すイザベラだった。

「こんな答え。そうでしょ？」

「じゃあそれでいいのか」

「悪くてこんな返事はしないわ」

また言い返すイザベラだった。やはりそのまま魚を食べ続けている。ディアルゴはここで一匹食べてしまった。そうしてもう一匹手に取ってまた食べるのだった。

「そうだよな、やっぱり」

「そうよ。またあいつに挑戦するわよ」

断固とした言葉だった。

「私もね」

「よし、じゃあまた行くな」
彼は言った。

「二人でな。それでいいな」

「それで今度は何時行くのよ」

「腕を磨いてからだ」

それからだというのだ。はっきりとした言葉だった。

「それからまた来る。いいな」

「その腕を磨く時だけねど」

今度はイザベラが彼に問うのだった。

「やっぱり一人じゃないわよね」

「ああ、そうさ」

そしてディアルゴもはっきりと答えるのだった。

「二人だ」

「そうよね、やっぱりね」

イザベラもそれを聞いて納得した表情を見せてきた。

「二人であいつに向かうんだからね」

「これからいつも二人だな」

ディアルゴはまた言う。

「二人でな。腕を磨くか」

「冒険するにしろ何にしてもね。これからずっと二人なのね」

「それでな。二人であいつ捕まえるからな」

このことも決まったのだった。

「絶対にな」

「わかってるわよ。さて、これから村に帰るけれど」

「ああ。それで？」

「それまでもこれから。いいわよね」

「わかってるって」

敗れはしたがそれでも意気はあった。彼等はまたシルバーヘッド

に向かうことはもう決めていた。そうしてそのうえで今は自分達の村に帰るのだった。

コンビネーションハンター 完

2009・6・15

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8786h/>

コンビネーションハンター

2010年10月8日15時45分発行